

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520799

研究課題名(和文) 近世朝鮮における漢訳西学書の伝来と受容に関する研究

研究課題名(英文) Research on the Western studies note translated into Chinese and about acceptance in Modern Korea.

研究代表者

鈴木 信昭 (SUZUKI, Nobuaki)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：50206512

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：中国では16世紀末以降、イエズス会宣教師によって、キリスト教思想や西洋の天文・暦学、地理学を紹介した多くの漢訳西学書が刊行された。本研究では、それらの漢訳西学書が、朝鮮にいつ頃、誰によって持ち込まれることになったのかという問題について、最近韓国で刊行された資料集『韓国歴代文集叢書』や『韓国文集叢刊』に基づいて、個別具体例を取り上げて考察したものである。また、西洋に関する情報が、日本や中国政府、或いはそれらの国々に滞在した朝鮮人によって伝えられた事実についても明らかにした。

研究成果の概要(英文)：After 16end of a century, the Western studies note translated into Chinese (漢訳西学書) to introduce a Christian thought and Western science was issued by the Society of Jesus missionary in China. This study makes the point whom a Western studies note translated into Chinese (漢訳西学書) was handed by down to Korea when clear. This problem investigates the anthology a Korean intellectual wrote and makes it clear. A point how information about Western countries was handed down to Korea I also considered.

研究分野：人文学

キーワード：朝鮮史

## 1. 研究開始当初の背景

### (1)

最近、韓国で朝鮮時代を中心とする知識人の文集『韓国歴代文集叢書』(全三千冊)と『韓国文集叢刊』(全五百冊)がそれぞれ刊行された。こうした個人の文集が容易に閲覧できるようになった研究環境の変化は、今後、朝鮮王朝史研究の全分野にわたって、これまでにない研究の成果をもたらすものと考えられる。また、韓国で10年ほど前に、『韓国所蔵中国漢籍目録』(全六冊)が刊行された。これによって、韓国の主たる研究機関で所蔵する中国で刊行された漢籍(線装本)の書名やその書誌情報がわかるようになり、韓国における漢訳西学書の所蔵状況についても、ある程度簡便に知ることができる状況となった。今後、朝鮮王朝史に関する研究は、個人文集という史料群を活用した新たな研究段階へ進むものと考えられる。

### (2)

中国でイエズス会宣教師らが著述・刊行した漢訳西学書は、17世紀初頭以降、朝鮮から中国に派遣された燕行使を通じて伝えられることになるが、朝鮮に伝来した漢訳西学書に関するこれまでの研究は、官撰史料の『李朝実録』・『国朝宝鑑』などに基づくものであったため、ごく限られた事例しか明らかにできなかった。具体的に17世紀前半に限れば、1603年の燕行使李光庭、1631年の燕行使鄭斗源、そして1644年の昭顯世子らが持ち帰ったものが注目されてきた。また、儒学者の西欧の学術や宗教に関する認識についても、李暉光(1563-1628)、李瀾(1681-1763)、安鼎福(1712-91)など「実学者」とよばれるごく一部の儒学者だけが注目されるだけで、それ以外の学問的特徴のない一般の知識人については、全く研究されてこなかったのが現状である。

しかし、上記した『韓国歴代文集叢書』や『韓国文集叢刊』中の個人の文集を調査すると、燕行使の使臣やその随員が中国に渡った際に、北京で漢訳西学書を購入したり、中国の知識人からイエズス会宣教師の動向や漢訳西学書に関する話を聞いたりしている事実があったことが分かる。また、どこで閲覧したのかは不明であるが、漢訳西学書の内容に言及した文言を書き残している文集もある。こうした事例は、これまでの研究で一切触れられてこなかったものである。

### (3)

これまでの朝鮮に伝えられた漢訳西学書に関する研究は、官選史料に記載されている朝鮮政府機関にもたらされた書籍、或いは政府機関が所蔵する漢訳西学書の書目に基づいて、それらがいつ頃、誰によって伝えられたのか、という点を明らかにするものであった。また儒学者の西欧の学術や宗教に関する認

識についても、李暉光(1563-1628)、李瀾(1681-1763)、安鼎福(1712-91)など「実学者」とよばれる一部の儒学者が注目されるだけで、それ以外の学問的特徴のない一般の儒学者については、全く研究されてこなかったのが現状である。しかし、個人の文集が容易に閲覧できるようになった現在、『韓国歴代文集叢書』などを通して、朝鮮儒学者の漢訳西学書の購入や閲覧の事実、或いは彼らが西欧の学術や宗教をどのように認識したのか、などという問題については、今後大いに研究される準備は整ったと言える。

## 2. 研究の目的

### (1)

本研究は、16世紀以降の中国でイエズス会宣教師が著述・刊行した漢訳西学書について、それを朝鮮に将来した人物やその内容に言及した人物を個別具体的に調べ上げ、朝鮮儒学者が西欧の学術や宗教をどのように認識していたのか、それを明らかにすることを主たる目的としている。この分野では、これまで主に『李朝実録』などの官撰史料しか利用できなかったが、本研究では、最近刊行された『韓国歴代文集叢書』(全3千冊)や『韓国文集叢刊』(五百冊)などを調査分析することにより、これまで不明であった儒学者個々人の事実を明らかにすることが第一の目的となる。

### (2)

儒学者個々人の文集を考察することで、漢訳西学書との関連を知ると同時に、韓国に現存する刊本・抄本の漢訳西学書を調査し、書誌学的検討を行うことを第二の目的としている。日本国内に現存する漢訳西学書の刊本・抄本の書誌情報についてはある程度研究が行なわれているが、韓国に現存する漢訳西学書についてはほとんど研究されていないのが現状である。こうした問題についても、可能な限り検討を加えてみたい。

### (3)

1600年以降の朝鮮においては、外交的に日本と明国、後金国と関係を持っていた。そうした関係から、朝鮮政府は日本や明国に使節を派遣していた。また、1600年以前に起こった文禄・慶長の役によって、多くの朝鮮人被虜人が日本に滞在するという希有な状況を生み出していた。1590年代既に日本は、ポルトガルやイスパニアと、後にはオランダやイギリスとも貿易を開始していた。日本に滞在していた朝鮮人、或いは日本や明国に派遣された朝鮮使節の使臣は、西洋についてどのような知識を得たのであろうか、こうした問題について明らかにすることが第三の目的である。

### 3. 研究の方法

#### (1)

『韓国歴代文集叢書』と『韓国文集叢刊』に収録されている儒学者個人の文集を一つ一つ調査し、漢訳西学書を購入したり閲覧した事実があったのかどうか確認した。また、明国や清国に燕行使の一員として訪れた人物の中には、その使行日記である「燕行録」が現存している場合がある。現存している「燕行録」は、集大成され『燕行録全集』として刊行されている。また1600年以降、朝鮮通信使の一員として日本を訪れた使臣の中には、日本訪問日記とでもいうべき「海槎録」を書き残し、現存しているものもある。『燕行録全集』や「海槎録」を個別に調査し、漢訳西学書や西洋に関する記述の有無の確認を行なった。

#### (2)

『韓国歴代文集叢書』、『韓国文集叢刊』や『燕行録全集』のように影印刊行されているものについては、一つ一つ検討を行なっていったが、それ以外に、現存する漢訳西学書については、版本・抄本を問わず、書誌学的検討を行なった。東洋文庫や国立公文書館をはじめとする日本国内の文書館には、数多くの漢訳西学書が所蔵されている。申請者によるこの十年程の調査でも多くの漢訳西学書が確認されてきたが、その範囲を大韓民国の文書館にも広げて調査を行なった。

### 4. 研究成果

#### (1)

朝鮮仁祖代に官僚として活動した金世濂という人物について検討を加えた。彼は朝鮮通信使の一員として1636年に訪日していたが、その時に日本使行記録『海槎録』を書き残した。その『海槎録』を見ると、金世濂は訪日する前にすでにマテオ・リッチの作成した世界図(『坤輿万国全図』或いは『両儀玄覽図』)を閲覧していた事実が明らかとなった。また彼は当時政争に巻き込まれていたために、知人宅を訪れて、そこでリッチの世界図を閲覧した可能性は低く、すでに『坤輿万国全図』を所蔵していた弘文館の官僚となった1616年9月、1623年3月・7月の時に同図を閲覧したのではないかと推測した。この成果は、「朝鮮仁祖代金世濂が見たマテオ・リッチの世界図」と題して論文発表した。

#### (2)

1590年代の文禄慶長の役によって被虜となって日本で生活し、その後帰国した朝鮮人による西洋に関する情報。1607年、1617年、1624年にそれぞれ日本を訪問した朝鮮通信

使一行によってもたらされた日本に滞在する「南蛮人」に関する情報。1620年代に明国に派遣された朝天使によってもたらされた「紅夷」に関する情報。それら三方向からの西洋に関する情報が結局統合されることがなかった1630年までの朝鮮政府の情報管理の状況を明らかにした。この成果は、「文禄・慶長役の後に朝鮮被虜人と刷還使が将来した西洋情報」と題して論文発表した。

#### (3)

1631年に明国に派遣された陳慰使鄭斗源は、帰路の登州でイエズス会宣教師ロドリゲスから西洋の文物を寄贈され、その中には幾種類かの漢訳西学書が含まれていた。官撰史料である『国朝寶鑑』に基づいて、これまで朝鮮に持ち帰られた漢訳西学書の書目について検討が加えられてきた。しかし、それらの中には『利瑪竇天文書』や『西洋国風俗記』のようにイエズス会士が著述したとは考えられないような書名が記載されており、実際の書名が何だったのか、長い間謎であった。こうした問題に対して、鄭斗源が帰国して10年後までの間に書かれた『乱中雜録』(抄本)に基づいて研究を行なった結果、「利瑪竇天文書」という文言は、その前文にあった『天文略』の説明文であり、「西洋国風俗記」も、その前文にあった『職方外紀』の説明文であることが明らかとなった。この成果については、「仁祖九年陳慰使鄭斗源が持ち帰った漢訳西学書とその反響」と題して論文発表する予定である。

#### (4)

(1)から(3)以外の成果としては、1655年に朝鮮通信使として日本を訪れた南壺谷が記した訪日記録『扶桑録』の中で、「曾て坤輿万国全図を見たことがある」と述べているなど、幾人かの朝鮮知識人が漢訳西学書を見た事実を史料から確認することができる。

こうした例は、あくまでも個人の例に限るが、彼らが見た漢訳西学書が果たして、どのような来歴で入手することができたのか、その関連まで調査して論文として発表したいと考えている。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計2件)

共著、東洋大学文学部史学科東洋史研究室(汲古書院)、高橋継男教授古稀記念東洋大学東洋史論集編集委員会編『高橋継男教授古稀記念東洋大学東洋史論集』、2016年、総705頁。  
鈴木信昭「朝鮮仁祖代金世濂が見たマテオ・リッチの世界図」、453-478頁。

共著、春風社、弘末雅士編『越境者の世界史』2013年、総301頁。  
鈴木信昭「文禄・慶長役の後に朝鮮被虜人と刷還使が将来した西洋情報」、146-166頁。

6 . 研究組織

研究代表者

鈴木 信昭 (SUZUKI NOBUAKI)

富山大学・人文学部・教授

50206512